



世界柔道選手権大阪大会への出場を決めた全日本選抜体重別選手権大会（写真提供 / 秋山さん）

自由に、どんなことでも吸収したい

世界柔道選手権(大阪)に出場する81kg級代表

世界柔道選手権大会が、いよいよ9月11日から14日までを会期に大阪市中央区の大阪城ホールで開催される。

世界柔道選手権は、1956年に日本で第1回大会が開催され、58年に第2回大会が同じく日本で開催された。だが、第3回のパリ大会以降は、柔道が世界中に普及したこともあり大会開催希望国が激増。3回目の日本での開催は、第2回目から実に37年ぶりとなる95年の千葉・幕張大会で

ようやく実現したほど。現在は、国際柔道連盟に187の国と地域が加盟している。

千葉大会から8年ぶり、4回目の日本開催となる大阪大会には、約100の国と地域から700人規模の選手が大阪に結集し、無差別を含む男女各8階級で熱戦を繰り広げることになる。特に今回は、7回目の出場で大会6連覇を目指す田村亮子選手をはじめ、96年アトランタと00年シドニー五輪の金メダリスト野村忠宏選

手、100kg級で世界ナンバーワンと誰もが認める井上康生選手らが出場するだけに日本選手団への期待は膨らむ。

なかでも、金メダルの期待をになって出場するのが、地元大阪出身の秋山成勲選手。日本が自信を持って送り出す、81kg級のエースである。

秋山さんが代表選手に選ばれたのは、世界選手権の最終選考会を兼ねた4月の全日本選抜柔道体重別選手権だった。決勝で対戦したのは、96年アトランタ五輪金メダリストの中村兼三選手。開始直後に秋山選手が左払腰で攻め、中村選手が腰を抜いて突き返そうとした瞬間、低い体勢からの内股が見事に決まり、わずかに13秒の速攻で一本勝ちして初優勝。世界選手権大阪大会への出場権を勝ち取っている。

プロフィール 秋山成勲（あきやま よしひろ）さん

1975年、大阪市生まれ。3歳ごろから在日韓国人の父親に連れられて柔道の町道場に通う。中学、高校と柔道部に所属し、清風高校では主将として全国大会団体戦出場の原動力となる。進学した近畿大学でも、正力杯関西学生選手権（71kg級）三連覇を達成するなど活躍した。97年、卒業と同時に韓国の釜山市役所に招かれ韓国代表を目指す。00年帰国。01年5月には韓国代表として東アジア競技大会（81kg級）優勝。01年9月の日本国籍取得以降は日本人選手として出場。02年には日本国際、パリ国際、釜山アジア大会で優勝し、今年4月の全日本選抜柔道体重別選手権大会（81kg級）を制し世界選手権出場を決めた。177cm、83kg、得意技は足技。三段。大阪市在住。

3歳から道場通い 高校では柔道部主将に

大阪生まれの秋山さんは、在日韓国人の父と韓国人の母を持ち、韓国人としての誇りを受け継ぎつつ、日本文化の中で育った。

そんな秋山さんに柔道を教えたのは、柔道7段で整骨院を営む父親の啓二さん(52)だ。啓二さんは、81年の全日本実業柔道個人選手権2部(編注=30歳以上。当時は体重別ではなく年齢別)で準優勝に輝いたこともある実力派。当時コーチを努めていた近畿大学2部(夜間)柔道部に、3歳になったばかりの秋山さんを同行し、「柔道着を着せて遊ばせがてら練習を見せていた」(啓二さん)。秋山さんと柔道との出会いである。

3歳で早くも“道場通い”を始めた秋山さんは、小学校に入学するころから、近所の町道場に通うことになる。その小学校時代に「今よりもっと痩せていて細かったのですが、自分より大きい子に勝つこともあったので、それがやっぱりうれしかったですね」と当時を振り返った。勝つことが、柔道を続ける原動力になったのだろう。中学校では柔道部に在籍しながら町道場にも通っている。

この間、父親の厳しい指導もあった。近くの公園での早朝練習は、他人には“シゴキ”に見えたことだろう。父親は「他人と同じことをしては勝てない。他人の2倍、3倍の練習を」と励まし、「勝って天狗にならないよう、勝ったときには厳しく、負けたときには優しく指導する」ことで秋山さんに柔道の道を説いたのである。こうした教えと、「ただ、強くなりたい、常に強くなりたい」という本人の気持ちが、その後の秋山さんを支えるのだ。

高校では、柔道部主将として全国大会団体戦出場の立役者となる。個人戦は大阪府大会で優勝したものの、肘の骨折のため全国大会出場を断念するアクシデントに見舞われている。

とはいえ高校時代は、日本のトップアスリートとなった現在でも忘れることのできない“基礎作りの時代”だった。「放課後の練習が4時間ぐらいで、帰宅はいつも夜の9時、10時。日曜日でも練習があって、休みは2ヵ月に1回あるかないかでした」と言いながらも、「かといって、それがいやというわけではなかったんです(笑)。“秘めた闘志”と形容される強靱な精神と、鋼のような肉体が、こうして形成されていたのである。

期待の新人として進んだ大学では、2年生から正力杯関西学生選手権(71kg級)三連覇を達成。3年生で同選手権全国大会準優勝に輝くのだ。

01年に日本国籍取得 主な大会を総なめ

大学卒業を機に、韓国柔道界からスカウトを受け、釜山市役所柔道部で韓国代表を目指す生活を始めている。所属先が、現在の平成管財になったのは99年である。

3年間を韓国で過ごしたあと、00年に日本に帰国。翌年9月に日本国籍を取得している。帰国したのは「日本の方が(柔道をする)環境がよかった」からであり、帰化したのは「ずっと日本に住んでたし、将来のことを考えて何かと有利になると思ったから」と、きっぱり。また国籍に関しても「変えようと思えばすぐに変えられるもの。別に悩むほどの事じゃないです」と、きわめて明快だ。

帰国後の戦績には目を見張るものがある。主な大会を総なめしているといっても過言ではない。それを秋山さんは「何かが吹っ切れて、気持ちにゆとりができ、それが柔道に出たのでは」と表現する。



全日本選抜体重別選手権大会(写真提供/秋山さん)

好きな言葉は「自由」。「何事にもとらわれずに、やりたいことをやるという意味での自由」で、「どんなことでも吸収したいという気持ちの現れ」だという。

柔道界では異彩を放つ金髪も、サッカー選手を見慣れた世代には抵抗はない。むしろ「服を着替えるように、頭(の色)も変えてもいいかなと思います」と白い歯を見せる。まさに“自由人”の面目躍如といったところか。

世界選手権大阪大会を前に、7月15日までの欧州合宿に参加。今後は国内合宿などをこなして本番を迎えるが、在日韓国人が多く住む大阪が舞台だけに、在日韓国人や韓国人からの盛大な応援も期待できる。

「そうなんです。日本に帰化しても、応援してくれる人がいっぱいいるので、すごくありがたいと思っています」と目を細め、「ぜひ金メダルを」との呼びかけに「頑張ります」と力強く答えてくれた。

(文・脇本勤/写真・高島悠介)

世界柔道選手権の観戦チケットは、ミズノ大阪店5Fプレイガイド(☎6223-7351)、産経新聞大阪本社3Fサンケイチケットセンター(☎6343-3319)で発売されている。

♥世界柔道選手権オリジナルポスタープレゼントあり。詳細は23ページ。